

研究主題 「『人とよりよく関わる力』を育てる指導の工夫

—交流及び共同学習の充実を通して—

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
東京都立八王子特別支援学校 教諭 福永 顕

第1 研究のねらい

現在、東京都教育委員会では、障害のある児童・生徒の将来の自立と社会参加を一層推進する取組を行っている（平成22年・東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画）。自立と社会参加の推進のためには、普段とは異なる環境の中で様々な相手と関わる力が求められる。ところが、障害のある児童・生徒は、学校外の大人や友達との関わりが限定されがちであるとともに、学校で学んだことを学校外の場面で発揮することが難しいという実態がある。

障害のある児童・生徒が学校外の人たちと関わる機会として、交流及び共同学習がある。「よりよい理解のために 交流及び共同学習事例集」（平成19年・全国特別支援教育推進連盟）によると、交流及び共同学習は、障害のある児童・生徒と障害のない児童・生徒とが共に活動することを通して、障害のある児童・生徒の自立と社会参加を促進するとともに、障害のない児童・生徒にとっても社会を構成する様々な人々と共に助け合い、支え合って生きていくことを学ぶ重要な学習の機会であると述べている。

そこで、本研究では、交流及び共同学習の実態と課題を把握し、課題解決につながる改善策を講じて交流及び共同学習を充実させる。その結果、障害のある児童・生徒に「人とよりよく関わる力」を育てることをねらいとした。

第2 研究仮説

特別支援学校において、交流及び共同学習の活動内容と教科等の学習を関連させて指導するとともに、交流及び共同学習を充実させるための指導資料を開発し、活用を図ることにより、特別支援学校の児童・生徒は、「人とよりよく関わる力」を身に付けることができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 本研究における「人とよりよく関わる力」について

特別支援学校の児童・生徒は障害の程度や障害の特性などによって、身に付けるべき「人とよりよく関わる力」が一人一人異なる。そこで、交流担当教員を対象に、教科等の学習を通して育てている「人とよりよく関わる力」について調査を行った。そして、その結果を「キャリア発達段階・内容表（試案）」（国立特別支援教育総合研究所・平成20年）を参考にしながら、表1のように分類・整理した。

表1 本研究における「人とよりよく関わる力」の領域と内容（※小学部を例にして）

領域	自他の理解	集団参加	意思表示	礼儀
内容	友達の行動に興味をもつことができる。	見本のとおりに行動できる。	身近な人に自分の気持ちや考えを伝えることができる。	身近な人に自ら挨拶や返事、お礼を言うことができる。

(2) 「人とよりよく関わる力」を育てる指導の工夫について

特別支援学校の児童・生徒が学校で身に付けた「人とよりよく関わる力」を学校外で発揮するためには、表1の内容を児童・生徒の実態に応じて、教科等の学習と関連付けて指導することや、身に付けた力を学校外でも発揮できるか把握し、適切に評価することが必要である。

2 調査研究

交流及び共同学習の現状を把握するために、都立知的障害特別支援学校12校23学部の交流担当教員32名と、交流校である小学校3校、中学校5校、高等学校2校の交流担当教員10名を対象に調査を行った。「交流校との打合せの時間の確保について」「交流及び共同学習のねらいと評価の設定について」「交流及び共同学習と教科等の指導の関連について」など8項目について、四件法（調査項目に対して、「あてはまらない・どちらかというにあてはまらない・どちらかというにあてはまる・あてはまる」の選択肢から該当するものを選ぶ方法）で調査した。

その結果、特別支援学校においては、回答した教員の約80%が、児童・生徒一人一人の具体的なねらいと評価の設定ができていないと回答した。小・中学校、高等学校においては、専門的知識の不足から、障害者理解についての学習が十分にできていないことが明らかになった。

そこで、交流及び共同学習の充実を図るためには、特別支援学校においては、児童・生徒に学習のねらいを明確にして、教科等の学習と関連付けて指導すること、また、打合せの際には、特別支援学校の教員から小・中学校、高等学校の教員に対して、交流の活動内容や事前指導の方法について、具体的な手だてを提案することが有効であると考えた。

3 開発研究

本研究では、次の三つの手だてを開発し、活用する。

(1) 交流及び共同学習のプランニング・マトリックス（図1）

交流に向けた打合せにおいて、特別支援学校の教員が交流校の教員に、両校の児童・生徒の学習のねらいに適した具体的な交流活動を提案できるようにした。これには、小学校から高等学校までの学習のねらいや交流活動例を示し、計画的・継続的な交流及び共同学習が実施できるようにした。

(2) 交流及び共同学習の指導計画モデル（表2）

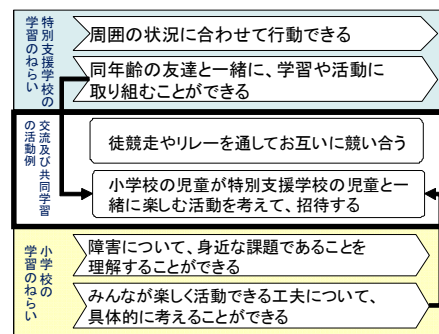


図1 交流及び共同学習のプランニング・マトリックス(一部抜粋)

表2 交流及び共同学習の指導計画モデル(一部抜粋)

	活動内容	「人とよりよく関わる力」における 評価の観点と能力領域	教科等との関連			
			国語・算数	体育	日常生活の指導	社会性の学習
導入	<input type="checkbox"/> 交流校の先生や児童に挨拶をする。	<input type="checkbox"/> 先生や友達に挨拶をすることができる。(礼儀)	<input type="checkbox"/> 挨拶ができる。	<input type="checkbox"/> 挨拶ができる。	<input type="checkbox"/> 挨拶ができる。	<input type="checkbox"/> 挨拶ができる。
展開	<input type="checkbox"/> 学級ごとに分かれて、交流校の児童が用意した模擬店に行き、ゲーム等を通して、交流を行う。	<input type="checkbox"/> 自分や友達の得意なこと、好きなことを知る。(自他の理解) <input type="checkbox"/> 友達の様子を手掛かりにルールを理解することができる。(集団参加) <input type="checkbox"/> 友達にゲームのルール等を尋ねることができる。(意思表現) <input type="checkbox"/> 先生や友達に挨拶をする。(礼儀)	<input type="checkbox"/> 得点を数えることができる。 <input type="checkbox"/> 自分や他の児童の順位が分かる。	<input type="checkbox"/> 的を狙ってボールを転がしたり、投げたりすることができる。	<input type="checkbox"/> 身だしなみを整えることができる。 <input type="checkbox"/> 慣れない場所でもトイレなどができる。	<input type="checkbox"/> ゲームの基本的なルールを理解できる。 <input type="checkbox"/> 順位を受け入れることができる。

活動内容に対して、「人とよりよく関わる力」における評価の観点と教科等における指導との関連が分かるように示すことで、特別支援学校の児童・生徒一人一人の学習のねらいを明確にするとともに、交流を学校における指導の効果を検証する機会として意識できるようにした。

(3) 障害者理解のための学習における指導資料（図2）

学習目標の例、学習の手だて、学習のポイントを記載することで、小・中学校、高等学校の教員が、障害のある児童・生徒との関わり方について指導できるようにした。主に、「関わり方

の工夫」と「環境の工夫」について、各発達段階に応じて計画的・継続的に指導できるようにした。

このように、交流及び共同学習のプランニング・マトリックスを活用して、学習のねらいを明確にするとともに、ねらいの達成に適した交流活動を設定する。そして、指導計画モデル及び障害者理解のための学習における指導資料を活用して指導すれば、交流及び共同学習は充実し、その結果、特別支援学校の児童・生徒に「人とよりよく関わる力」を育てることができると考えた。

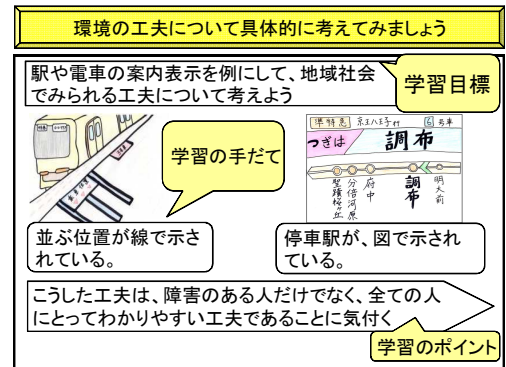


図2 障害者理解のための学習における指導資料(一部抜粋)

4 検証授業

都立知的障害特別支援学校小学部の児童6名の小学校との交流及び共同学習を、検証授業として設定した。検証授業の概要を表3に示した。

表3 検証授業の概要

対象	教科等	授業回数	学習活動と学習のねらい (※一部抜粋)
知的障害特別支援学校小学部自閉症学級に在籍する第5学年児童6名	社会性の学習	全6回	模擬店場面において、店員役の教員との適切なやり取りを身に付ける。(礼儀) 模擬店場面において、ゲームのルールに従って参加する力を身に付ける。(集団参加)
	特別活動	全1回	交流校である小学校の学校祭りで、教科等の指導を通して身に付けた「人とよりよく関わる力」を発揮し、交流校の児童とよりよく関わるができる。
小学校に在籍する第6学年児童60名	特別活動	全2回	障害者理解のための学習における指導資料を通して、障害のある児童と関わるための知識や技能を身に付けることができる。 障害者理解のための学習で学んだことを交流及び共同学習を通して、実践することができる。

(1) 交流及び共同学習の「プランニング・マトリックス」の考察

学校祭りにおける交流に向けた打合せにおいて交流及び共同学習のプランニング・マトリックスを活用したところ、交流校の担当者から「両校で学習のねらいを共有したり、ねらいの達成に適した活動内容を決めたりする際に活用できる」などの肯定的評価が得られた。

(2) 特別支援学校における「指導計画モデル」の考察

本研究では、「認知の発達段階(太田 Stage)」(多くの知的障害特別支援学校で活用している、障害のある児童・生徒の実態を把握するため指標)の評価が、Stage II (シンボル機能の芽生えの段階) から Stage IV (基本的な関係の概念が形成された段階) の児童6名を対象とした。そして、社会性の学習を通して、教科等と関連させた指導の有効性について検証を行った。

ア 指導の工夫

交流を意識して、教室内に輪投げゲームの模擬店場面を設定した。そして、「こんにちは」や「ありがとう」といった挨拶やお礼の言葉を店員役の教員に伝えることができること、「線の手前から投げる」「決められた回数だけ投げる」といったゲームのルールを守って行動できることなどを学習のねらいとして設定し、指導を行った。児童が自分ではうまくできなかった場合には、教員が適切な行動モデルを示すなどの支援を段階的に行った。また、店員役を別の教員に交代したり、ゲームの種類を輪投げからボウリングに変更したりするなどの工夫を行った。最後に、学校で児童が自分でできるようになった後、交流において行動観察を行った。

イ 指導の結果と考察

特別支援学校の児童A(太田 Stage の評価: Stage II) は、交流において「ルールに従っ

て行動する」ことは生起したが、「相手に挨拶やお礼を言う」といった行動は生起しなかった。他の5名の児童についても同様の傾向を示した。

これは、「線の手前から投げる」といったルールは、社会性の学習の指導場面でも実際の交流でも「線」という共通の環境的手掛かりであったため理解することができたと考えられる。一方、挨拶やお礼を言う行為は、相手との会話の文脈によって左右される極めて流動的な行為である。そのため、教員を相手に学校でできていたことが、児童同士での交流場面ではできなかつたと考えられる。また、不特定多数の人たちと関わる経験の不足も、交流において挨拶等ができなかつた理由の一つとして考えられる。

そこで、交流及び共同学習における児童の行動観察から得られた情報を基に日常の指導を振り返り、児童の実態に応じて、校内において児童同士が関わる機会を段階的に取り入れるなどの指導の工夫を図り、再度、交流及び共同学習の機会を活用することで、学校外における様々な人とよりよく関わる力を育てていくことができると考える。

ウ 開発物を活用した成果

交流時に、特別支援学校の児童が教員から離れて交流校の児童と共に楽しく活動できていた様子から、指導計画モデルの活用は、「人とよりよく関わる力」を育てる上で一定の効果があつたと言える。担任からは、特別支援学校の児童の自立と社会参加に向けた現状の把握及び指導改善の視点をもつことができ有効であつたとの評価を得られた。

(3) 「障害者理解のための学習の指導資料」の考察

障害者理解のための学習を通して、障害のある児童との関わり方について知識を深めるとともに、実際の交流を通して、学んだ知識を活用して関わろうとする様子が、小学校の多くの児童に見られた。小学校の児童Bの感想を表4に示した。また、授業を行った小学校教員2名に対する聞き取り調査からも、学習のねらいを明確にする上で指導資料が有効であり、児童の発達段階に応じた内容であつたとの評価を得られた。

表4 小学校児童Bにおける障害者理解のための学習と交流及び共同学習についての感想

障害者理解のための学習における感想	交流及び共同学習にける感想
「早口で話をしたり、1回に長い文章で説明したりすると分かりにくい」ということが分かりました。ゆっくりと分かりやすく、やさしく伝えようと思います。	ストラック・アウトでは、「どうぞ」といって玉を渡したり、「ここから玉を投げてね」と伝えたりすることができた。特別支援学校の友達に伝わったようで、ゲームを楽しんでくれたことがとても嬉しかった。

第4 研究の成果

- ・ 交流及び共同学習を活用することは、特別支援学校の児童に「人とよりよく関わる力」を育てることができるとともに学校における指導の改善につながる事が明らかになった。
- ・ プランニング・マトリックスや指導計画モデル、障害者理解のため学習の指導資料といった、交流及び共同学習の充実を図るための手だてを明らかにすることができた。
- ・ 調査研究によって、交流及び共同学習の実態と課題を把握することができた。

第5 今後の課題

- ・ 検証を行った単元以外についても、交流及び共同学習を活用して「人とよりよく関わる力」を育てる指導の工夫を追究する。
- ・ 小学部と小学校以外における交流及び共同学習についても、研究成果を活用した実践を積み重ねて、研究成果の更なる改善を図っていく。